

公益財団法人 住友財団 ニュース

第28号・2026年7月

<News>

- 「文化財よ、永遠に2026」閉幕しました
- 第18回評議員会、第76、77回理事会開催
- 主な活動実績(2026年5月～7月)
- 基礎科学研究助成、環境研究助成
- 文化財保存修復学会参加報告(山形)
- 日本美術を通じた住友財団とポーランドの国際交流について
- 日本関連研究・インドネシア訪問
- 2025年度年次報告書、英文デジタルブック発行

「文化財よ、永遠に2026」閉幕しました

住友財団の文化財維持・修復事業助成の成果展示となる「特別展 文化財よ、永遠に2026－次代につなぐ技とひと」が共催施設である泉屋博古館(京都)において6月28日好評裏に閉幕しました。

住友財団の助成によって修復された文化財約30件が3期にわたって展示されました。入場者数は13千人を超え、泉屋博古館(京都)ではコロナ禍以降、最多のお客さまにお越しいただき賑わいました。修理についての説明を多く記載した新刊図録も評判を呼び、約1千部の売り上げとなりました。

所蔵者をはじめとする関係者の方々のご協力により開催することができました。また、多くの方々に、文化財修復の意義・重要性をご理解頂けた展覧会が開催できたと思っています。



第18回評議員会、第76、77回理事会開催

6月2日に評議員会と理事会を合同で開催しました。

昨年度選出された評議員として、住友グループ外では東京大学梶田隆章教授、東京大学菅裕明教授のお二人が初参加となりました。

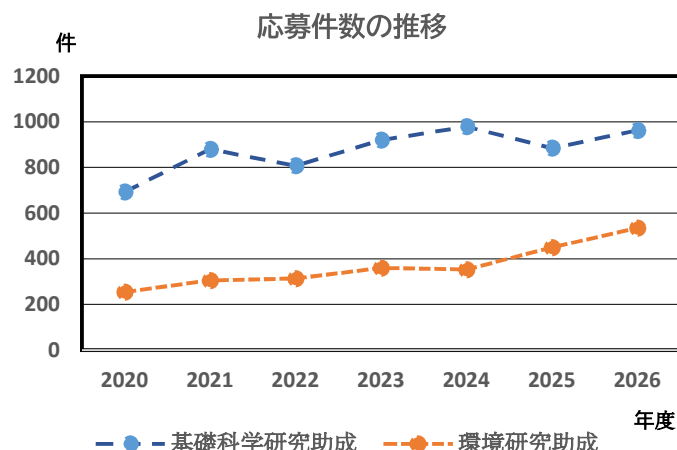
また、新しい評議員として、国宝修理装幀(そうこう)師連盟の山本記子理事長が選出されました。装幀とは書物・絵画などの文化財を美しく、かつ長く保存できるようにすることを指す言葉です。同連盟は、国宝・重要文化財をはじめとする貴重な文化財の保存修理を専門的に行っている会社の集まりで、山本評議員は住友財団が助成している文化財修復の分野に深い見識をお持ちです。



主な活動実績(2026年5月～7月)

4～6月	2026年度 基礎科学研究助成・環境研究助成募集(6月末終了)。 「文化財よ、永遠に2026」特別展(京都6/28、東京7/5終了)。
6月	第18回評議員会、第76回理事会、第77回理事会開催。
6月	アジア諸国における日本関連研究助成(インドネシア出張)
6月	海外文化財維持・修復事業助成(米国出張)
7月	2026年度 環境研究助成 第1回選考委員会開催(7/22) 2026年度 基礎科学研究助成 第1回選考委員会開催(7/27)

基礎科学研究助成・環境研究助成



2026年度の基礎科学研究助成および環境研究助成の募集を4月15日から6月末まで行いました。

今年度の応募件数は、
 基礎科学研究助成 963件(前年比78件増加)
 環境研究助成 535件(同85件増加)
 となり、全体として前年比12%の増加となりました。

基礎科学研究助成は、昨年度から45歳以下という年齢制限を導入し応募件数の減少が見られましたが、それ以前とほぼ同件数となっています。

環境研究助成の応募件数は、およそ10年前の水準に回復してきた、一方で平均年齢は、過去最も高い47.1歳でした。

文化財維持・修復事業助成 文化財保存修復学会参加報告

山形市で開催された文化財保存修復学会第48回大会に参加しました。今回は6月6日、7日の開催でしたが、6月5日に特別行事として東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターを会場としたオープンスタジオが開催されました。非常に興味深いものでしたので併せてご報告します。

○東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター
 全国初の大学附属文化財保存修復研究センターとして、2001年4月に設立されました。JR山形駅から東南方向に約5キロほどの山形市内を見渡せる場所にキャンパスがあり、文化財保存修復研究センターもその一角にあります。4階建ての建物(写真上)の1階と3階に修復・分析・研究室が配置され、考古資料から彫刻、絵画、工芸品など幅広い文化財に対応できるようになっていました。

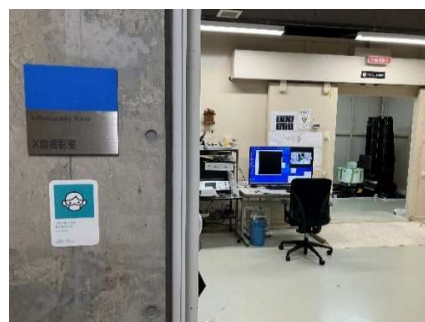
オープンスタジオでは、各室に担当の教員が待機しており参加者にその室で行っている修理等について説明していただき、CT撮影システム(写真下)の操作デモも見せていただけました。
 東洋絵画の修復室には、2025年度の海外文化財の助成が決まった「芦雁図屏風」(ポーランド・ポズナン国立博物館所蔵)が移送されており、修復前の状態を見て修復を担当する方とも話ができる貴重な機会にもなりました。

このセンターの最大の特徴は、所蔵者の承諾を得て、受託した文化財の修復作業に学生を参加させ、実践的な体験を通じて教育ならびに技能習得を図っていることです。文化財の修復を担う人材育成にも重要な役割を果たしている施設といえます。

○文化財保存修復学会

山形市での開催は1997年以来2回目ということですが、今回600名以上の参加が見込まれ、前回より大幅に増加したことを開会挨拶で学会理事長が感慨深く話されていました。文化財保存修復に関わる大学や研究機関の研究者が中心ではありますが、修復工房の関係者や学生の参加も多い印象でした。

2日間にわたる大会では、20件の文化財に関わる修理・調査等の研究発表があり、ポスターセッションでは95件のポスター発表、特別ポスターセッションとして東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターの取組等に関するポスター展示が行われました。大会を通じて、多方面にわたる文化財保存修復にかかわる現況や課題、新しい知見を知ることができ、文化財修復のバックボーンとなる知識・技術等の向上が進んでいることを実感しました。また、研究発表の中には、住友財団が助成を行った海外文化財の保存修復事業に関わる研究発表もあり、その発表者等と対面して話ができる機会にも恵まれました。



海外文化財維持・修復事業助成

【日本美術を通じた住友財団とポーランドの国際交流について】

ポーランドと聞いて、皆さんは一番最初に何が思い浮かぶでしょうか？首都ワルシャワ、作曲家ショパン、民族舞踊ポロネーズ、サッカー好きな人はレバンドフスキー、等の都市名や著名人を思いつく方もいるでしょう。ポーランドは地理的に北はバルト海とロシアの飛び地カリーニングラード、西はドイツ、東はウクライナ等と隣接しており、国土は日本の面積の約85%、人口は3,733万人(2025年)、日系進出企業数390社、在留邦人数2,031人(出所:外務省「海外進出日系企業拠点数調査2024年」、「海外在留邦人数調査統計(2025年10月1日)」)と説明を聞いても、あまり馴染みが無いなあという印象を持つかもしれません。

当財団は、2016年に同国のヤン三世王宮美術館が所蔵する「南蛮様式蒔絵螺鈿机」に、初めて修復助成を行って以来、2023年迄、漆工芸品4件と合わせて計5点の修復助成をしました。又、2021年には同国のポズナン国立博物館が所蔵する平安末期頃の阿弥陀如来像の事前調査助成を行い、22年～24年迄、修復助成を実施(26年3月に完成)。25年度は、同館が所蔵する江戸初期の屏風の修復とクラクフ国立博物館が所属するポーランドで最も有名な日本着物(*)の修復技術移転支援に助成を実施しています。

今年5月には、ポズナン国立博物館のジョアンナ・ココッチ主任修復士が前記の屏風の修復の為来日し、当財団と泉屋博古館の共催による修復文化財の特別展「文化財よ、永遠に2026」を京都で見学されました。

当日は、泉屋博古館京都の竹嶋学芸員の協力を得て、修理後の展示品のうち、仏像や絵画の説明とともに、修理に係るエピソードを紹介しました。福井県で和紙を学んだ経験もあるココッチ氏には、住友財団の海外文化財維持・修復助成事業の活動成果を十分に理解し、特別展を楽しんで頂きました。

ポーランドにおける日本美術の浸透は、ポーランド人日本美術蒐集家フェリックス・ヤシェンスキ氏(1861-1929)が1920年にクラクフ国立博物館に寄贈した北斎、広重等の浮世絵約5,000点を含む日本美術品約6,500点と、その後同氏の功績を讃えて建設され1994年に開館した日本美術技術博物館(Manggha館)が大きく貢献しています。

住友財団は、ポーランドのクラクフ国立博物館、ポズナン国立博物館等の日本美術品の保存・修復を通じて、ポーランドにおける日本美術の研究・教育・国際交流にも貢献しているのです。

(*)2026年4月財団ニュース第27号でご紹介。

泉屋博古館 京都見学の様子



(写真左から)泉屋博古館京都/竹嶋学芸員、筆者、ジョアンナ・ココッチ氏



(写真右下)泉屋博古館所蔵の阿弥陀如来坐像を前に、ポズナン国立博物館所蔵の阿弥陀如来像の画像と見比べるココッチ氏。ともに住友財団が修復を助成した。



(地図、中央がポーランド共和国)

アジア諸国における日本関連研究助成

インドネシア訪問

6/7(日)から6/17(水)までインドネシアに出張しました。5都市(ジャカルタ、スマラン、スラバヤ、マラン、バンジャルマシン)、12校の大学において「住友財団・アジア諸国における日本関連研究助成」に関する説明会を開催、併せてQ&A・ディスカッションのセッションを実施しました。インドネシアは近年、助成応募者が急増しており、応募候補者に応募要領、要点を正確に理解してもらうことを念頭に説明を行いました。

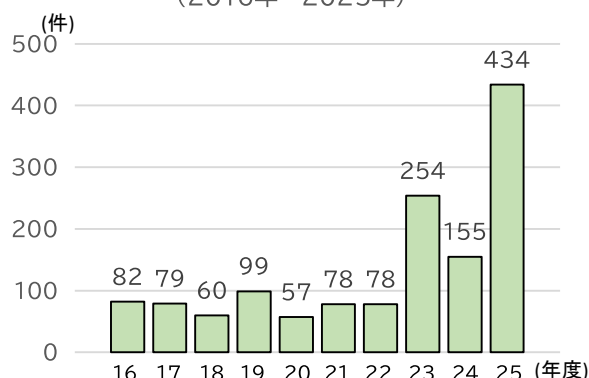
応募者の増加に伴い、研究内容も拡大、多様化しています。今回の訪問先の大学には日本の著名大学への留学経験を持つ日本関連研究者も数多くいます。ジャカルタのような大都市に限らず、地方都市の大学においても日本関連研究者は数多くおり、様々な内容の日本関連研究に従事しています。

各大学により日本関連研究の内容、研究者は様々ですが、“インドネシア日本研究学会(ASJI)”等、インドネシア国内において日本関連研究に関し、大学間のネットワークが構築されており、情報交換・共有、連携が図られています。今回の訪問先大学も事前にASJIに相談し、選定して頂きました。

また、国際交流基金、在インドネシア日本国大使館との面談の機会を頂き、非常に有益な情報交換の場となりました。

今回の出張における説明会、Q&A・ディスカッションを通じ、インドネシアにおける日本に対する関心の高さを改めて実感しました。日本について高い関心を持つ学生も含め多様な日本関連研究者に対し、住友財団の助成を通じ、引き続き有益な支援ができるよう、努めてまいります。

インドネシア助成応募者数推移
(2016年－2025年)



ブラウイジャヤ大学(マラン)での説明会の様子



2025年度年次報告書、英文デジタルブック発行

2025年度の年次報告書を発行いたしました。本年次報告書では、新設2年目となる修復文化財展示事業助成案件のご紹介などを掲載しております。

また、Webから閲覧できる電子ブックもリリースしました。

https://www.sumitomo.or.jp/annual_report/index_nenpou.htm



(年次報告書2025)

デジタル化の一環として、英文デジタルブック海外文化財2025を公開しました。

今後も活動報告やその成果をデジタル化により、より利用しやすい方法でご提供してまいります。

<https://www.sumitomo.or.jp/bookshelf/index.html>



(デジタルブック海外文化財2025)

* 右のQRコードを読み取ることで、スマートフォンやタブレットからも直接ご覧いただけます。